

フォート・カニング・パーク (Fort Canning Park) にて

2005. 1. 10

(株) 総合計画機構 糸谷正俊

平成 16 年 11 月 3～7 日、(財) 都市緑化技術開発機構の海外研究調査団の一員としてシンガポールを訪問した。その際訪問したフォート・カニング・パークの見聞記をまとめたものである。

1. はじめに

レポートの受け持ち地ということもあって責任上動いたせいで、小雨の中でのわずかな見学時間であったが、フォート・カニング・パークはシンガポール研修のなかで私に貴重な体験と思索の時間を提供してくれた。

シンガポールで最も古いサイトの 1 つであるフォート・カニング・パークは、超近代的な都市国家シンガポールの中で歴史性を感じさせる数少ない場所であり、それも植民地以前の遺跡によって島のプリミティブな様子をうかがうことができる。それは 14 世紀のマレー王国支配時代の豊富な出土品と遺構であり、元朝の陶磁器、コイン、ガラス、この地で作成されたと思われる瀬戸物や土器などからなる遺物は、この地が海のシルクロードにたとえられる証を提供している。

フォート・カニング・パークにある考古学上の発掘現場を訪れた時、当地も平和な島の生活が脈々と続いた上に、マレー王国の進出があり、そして 16 世紀と 17 世紀には、「地域の交易に不必要な権力は排除する」という貿易国家の帝国主義的論理によりポルトガルの攻撃をうけて、シンガプーラ（獅子の町＝マレー王国時代の地名）はふたたび小漁村にたちもどった、という地域史を知り、日本でいえば何かと縁がある琉球王国の流転の類似性と重ね合わせて、感慨深いものがあった。しかし今この文章を書きながら考えると、この時代の亜熱帯・熱帯地域の多くが、同様の変遷を余儀なくされているのであり、平和な時代から列強支配の時代、そして独立の時代を経て現代に至る、普遍的な物語の一つでしかないことに気づいた。あまりにも人工的な都市国家というイメージが強いシンガポールであるから、いにしへの侵略の歴史をうかつにも失念していた自分を恥じ入る次第である。

もとよりフォート・カニング・パークが歴史性を有しているゆえんは、近代都市シンガポールの基礎を作ったイギリス東インド会社書記、サー・トーマス・スタンフォード・ラッフルズが 1822 年にここに自分の家と庭園を造ったことや、続いて 19 世紀中頃までシンガポール総督の住居となったこと、その後イギリス植民地政府はこの地に砦（軍事基地）を築き、次いで第二次世界大戦の時には日本が、最終的にはシンガポール国軍がこの地を軍事施設として使ったという経緯による。

今の公園を一見するだけでは想像もつかないが、フォート・カニング・パークがシンガポール歴史発祥の地のひとつであり、重要な史跡地であることを、現地および帰国後の資料検討で再認識したことを本文のイントロとさせていただき、以下、当地で感じたことを思いつくままに綴りたい。

2. ラッフルズは何故この地を自らの住まいとして選んだのか？

1819年、ラッフルズはシンガポール川のほとりに上陸し、この島を中継港と定め、無関税の自由港政策や都市計画を進め、近代都市の基礎を築いた。やがてシンガポールはペナン、マラッカと合わせた海峡植民地の中心地として発展し、今日に至る。

ところでフォート・カニング・パークは、ラッフルズ上陸当時は「禁断の丘（Bukit Larangan）」とよばれ、土地の民にとっての聖地であった。現地人の祖先の眠る場所である聖地を切り開いて自らの居住地とすることは、ラッフルズにとってはなかなか勇気のいることではなかったかと思われる。

いかに眺望に優れてはいても、土地の人々といらぬ摩擦は避けたいと思わないはずはない。それとも、聖地だからこそ、そこをまず開発することで統治をスピーディーに行うことを意図したのか。禁断地を開化する先進国のおごりを感じたのは、私だけであったか。

イギリス東インド会社と現地住民との力関係の大きな差から、あまりトラブルもなく、彼の居住地が造られることとなったが、彼はプライベートハウス開発にとどめずに、開発を社会的により意義あるものとする植物園の整備にも着手する。植物園の規模は19haといわれ、今のフォート・カニング・パーク（18ha）よりも大面積であった。そして有用植物の栽培実験をはじめ、やがてこれが現在のシンガポール植物園に引き継がれることになる。有用植物園を築造して公開したこと、聖地を開発したこと、このあたりにイギリス植民地政策の光と陰の部分を見る思いがする。

3. 遺跡公園と墓地

フォート・カニング・パークは、日本でいえば国営飛鳥公園や国営吉野ヶ里公園に代表される遺跡公園といってよい。日本の遺跡公園でいつも問題となるのが、どの時代の歴史に焦点を当てて復元整備するか、ということ。飛鳥公園は遺構の復元をせずに、遺跡のある公園としての雰囲気を出し出した優れたランドスケープを造形し、吉野ヶ里公園は弥生時代中期の遺構復元をメインにしているが、こちらも風景づくり、ランドスケープアーキテクチャーに力が注がれているやに聞いている



写真1 フォートカニングセンター

（こちらは公園として公開されてから私はまだ訪問していない）。

ランドスケープコードといわれる開発基準を持ち、緑化と景観整備に特段に力を入れているシンガポールにあって、フォート・カニング・パークの歴史的なランドスケープはどのようなものであったか。

時間の制限と雨天から、公園のランドスケープで印象に残るものは特に見あたらなかったが、それでもスパイスガーデンから下りてきたあたりのフォートグリーン帯のなだらかな芝生斜面とフォートカニングセンター周辺は、歴史的な建造物や遺構を活用しつつ、

現代の公園として美しく甦っており、今や新婚カップルの写真撮影のメッカとなっているという。

ところでフォートグリーンは、1830年からキリスト教徒の墓地であったが、1970年の公園化工事に際して、墓碑を芝生地の境界の壁に埋め込んで敷地を芝生広場として整備したものである。

また、当公園の一角には、マレー語で「聖なる場所」という意味の「ケラマト (Keramat)」も残されており、これも祖先の王族の墓といわれていることから、この公園は墓地公園でもある。我々が訪れたときもちょうどドラマダン (断食) にあたり、関係者がお祈りを捧げているとのことで、聖地で大声を出すのは控えるようにとの指示があった。ラッフルズの邸宅も公園化の過程で再び聖地性を取り戻したようで、面白く思った。

4. 軍事施設

案内書ではこの公園内に軍事施設やその遺構が多く残っているらしいが、見学できたのは砲台ぐらいである。この砲台も、敵を攻撃するものではなく、実は時計の役割を果たすものであったという。9時、11時、15時に大砲で時刻を知らせたのである。

時間の概念がほとんど不必要な南国の地に、定時制という近代概念を持ち込む象徴的施設であったといえる。



写真2 時刻を知らせる大砲

5. 香料庭園 (Spice Garden)

1822年、ラッフルズの造った実験植物園のうち、今に残るのが0.1ha規模の香料庭園である。植栽されているものは、ジンジャー (しょうが)、ガランガー (カレーの材料)、ベニの木 (色を採る)、ドクダミ、アッサム、マラッカ、シナモン、レモングラス、コーラの木、イエライシャン、クワズイモ、トンガリーの木、コットン、ヘナの木、等々。沢山の種類をお聞きしたのであるが、ノートに書けたのはこれくらいでした。



写真3 ペPPER?

6. 赤い傘

フォート・カニング・パークを案内してくれたのは、公園マネージャーのコウさんと、ビジターセンター担当のデニスさん。特に豊かな体格のデニスさんは、精力的に説明され

て、ついて回るのが精一杯だった。

また嬉しかったのは、デニスさんが小型トラックに大きな赤い傘を何本も運び込んでみんなに手渡してくれたこと。雨具はもちろん各自用意していたのだが、見学用の大きな傘のお陰で、雨もそんなに負担に感じずに楽しく見学ができた。

傘の力の偉大さに感動した、パークマネジメントに従事する同行者（新井氏）は、さっそく国営公園管理に取りいれるとのことであつたが、果たして安曇野公園では実現しているのだろうか。



写真4 傘を運んだ小型車



写真5 デニスさんと後ろ姿の奥田先生